

## 和歌山で「協同」の基盤と方法を考える 第9回子育て・文化協同全国交流研究集会から

山本 健 慈 (和歌山大学) 市原 悟 子 (アトム共同保育所)

### 北海道から九州までの参加

昨年12月4、5日和歌山市で表題集会在開催された。第一日目の開会全体会は、現地からの報告(3本)と池上惇京大教授の基調講演(「協同の思想で教育・文化・福祉の新しい時代を」)で350人参加。音楽とおしゃべりの夕べは、晚餐をかねてオーボエ演奏(米山龍介和歌山大助教授)と佐藤一子(東大)、出原泰明(和歌山大)、今崎暁巳(ルポライター)3氏のミニレクチャーで、160人。第二日目は11分科会(3時間余)に450人、閉会全体会は増山均日本福祉大教授の記念講演(「ヨーロッパの子育て・生活文化から学ぶこと…〈待てる文化・楽しみあう暮らし〉の復権を…」)と感想交流で250人。参加者は、北海道、青森、山形から長崎、福岡まで。協同総研からも黒川理事長、広瀬事務局長が参加された。

この集会は、1985年「地域つくりと教育・文化運動交流研究集会」としてはじまり、第6回以降、表題のようになっている。

### 個人の創意、イニシアティブを大切に

以下和歌山での準備過程および集会自体において基本的に大切にしてきた点を述べながら「協同」の基盤と方法について考えるところを織り込みたい。

和歌山集会の準備は、教育文化協同組合、国民教育研究所、中小企業家同友会、教育相談所、子育てサークル、子ども文庫、学童保育、共同保育所、母親連絡会、子ども劇場、生協、障害者施設に関係する個人のよびかけではじまった(最終的に200人近い実行委員)。

集会テーマを「あなたの願い、わたしのとりくみ持ちよって、「子どもの最善の利益」をめざし、家庭・学校・地域で協同(ネットワーク)を広げ

よう」とした。いま地域で自由で創意ある活動をつくりはじめている市民が存在している。また市民として専門的力を発揮しようとする専門家がきつといる。そんな「いい人、素敵な人と出たい」という願いを込めた。

自治体の子育て環境づくり施策策定に関わる委員をしている青年団体女性役員は、「この集いにこそほんものがありそう」と新聞記事をみて事務局会議に飛び入り参加してきた。感動的な〈音楽とトーク〉で出演してくれたオーボエ奏者も、開会全体会の構成・脚本を担当し当日は演出・音響を引き受けてくれた放送ジャーナリストも、高校生ロックバンドとのジョイントで開会全体会のオープニング演奏を企画・出演してくれたミュージシャン(夫婦)も出会えた人たちである。

「地元文化企業の協賛で早期教育の場をつくった。子育てサークルのようなものでは現在の親の期待には応えられない」と忠告的に発言する女性が参加してくる場面もあった。こうした出会いも、子育て・文化の現状認識をリアルなものとし、逆に「協同」の意味を深めさせてくれた。

### 団体、組織は協賛と支援に

個人のイニシアティブを基本にはしたが、これまで教育・文化運動に取り組んできた団体・組織を軽視したわけではない。それぞれには主旨の理解を求め、賛同団体として、可能な財政的、広報的支援を依頼した(教職員組合など労組、生協、農民組合、文化、福祉団体、学校法人など20団体)。

若い教組役員は、動員型の集会しか経験がなく、自由な市民が自発的に集うというイメージが当初理解しがたく、会議で飛び交う多彩な言葉、イメージに戸惑いがちであったが、「組合役員だからぼくがここにいるのではなく、ぼく自身がこの集会でなにがしたいかが大切なのですね」と理解を



ふかめていった。県教組役員は、「地域での市民、親の活動にふれてこそ教員は励まされる。いま組合に必要なことはこの集会のような場」と実行委員会事務局を引き受けた。〈地域から学校(教師)はどうみえるか…学校、地域を考える〉分科会に参加した県教組委員長(コメンテーター)も「この集会の中身こそ、めざしてきた教育共闘、教育の統一戦線の現代的イメージ」と語る。

### 若者を主役に、女性を主役に

〈子育て〉をテーマとし、市民性の成熟を現状認識としている以上、集会の内容・形式もそれにふさわしいものにすることが当然であり、実行委員長(子ども劇場)、副委員長(生協)、事務局長(県教組)は女性が当たることにした。

もう一つは、青年・若者を主役として位置づけることである。準備学習会での、子ども劇場高校生の、小学生たちの悩みを電話で相談にのったとりくみの報告は、中年・父母・教師を励ます堂々たるものであった。開会全体会の報告とオープニングのロック演奏は彼らに任せた。音楽的な技量はこの際問題外であり、技量不足は音響専門家が苦心してカバーした。

分科会も第1分科会を「高校生・大学生集まれ(中学生も歓迎)」とし、運営・司会はすべて若者に任せた。赤松文相の「丸刈強制などぞっとする」という発言を引きだした大阪の中学生グループも参加、高校生・大学生に刺激を与えた。参加者は50人、大規模な分科会であった。沈黙が仕事となったコメンテーターは「子ども・青年の声を

直接聞かない研究集会などもはや時代遅れ」(増山日本福祉大教授)と感想を寄せている。「若者を主役に」は他の分科会でも貫かれ、「学生の意見を尊重して下さったことも嬉しかった」という感想が寄せられている。

女性と男性との共同、若者と年配世代との共同があったのである。

### 地域の「協同」の蓄積と到達を生かす

和歌山は、1960年前後、激しく勤務評定・学力テスト反対闘争が闘われた。教師の孤立した闘いではなく、地域住民の学校・教育を守る闘いでもあった。したがって教育実践・教育研究は当然のように〈地域〉を重視してきた。伝統ある部落解放運動・同和教育運動も、同和地区内外の共同の地域づくり・地域子ども集団づくりにとりくみ、障害児(者)運動は、多くの共同作業所、障害者施設を創り出している。(※参考、19頁資料)

開会全体会で報告し感銘を与えた精神障害者社会復帰施設「麦の郷」は地域での「協同」の蓄積のなかで生まれた。共同作業所に精神障害者をうけとめたところからこの施設づくりははじまった。この運動に自らの人生を投じようとする人が生まれ、家族が支援し、多くの知人・市民が支援する。市民に励まされ患者・家族も頭をあげて施設づくり、仕事づくりにとりくみはじめる。なかば疑念をもって見ていた地元の精神科医たちも、この実績を率直にうけとめ動きはじめる。自治体行政の冷やかな対応にもかかわらず、法人格を取得、生活、労働、療育すべてにわたる事業をいまや展開している。

地域とのトラブルも障害者自身が、自らこれまでの人生を語り、これからの決意を語るなかで、自治会として支援する状況を生み出している。

この実績に対応し、厚生省・労働省も関係法規の改正にも着手し、日本と世界の著名な精神科医が訪れ涙し、「日本ではじめて障害者自身が実名で暮らすところを見た」との驚き示すが、推進してきた人たちは「自分たちは、目の前にある課題に前向きに取り組んできただけ。もっとやらなけ

ればならないことが」と淡々としている。

和歌山に隣接する熊取町（大阪府）のアトム共同保育所からの地域づくりも「この実践には地域のグランドデザインがみえる」（池上）貴重な財産であった。共同保育所は、緊急・深刻な保育要求を受けとめるがゆえに、高齢者問題、自営業者の営業不振、労働者の長時間労働など地域・住民の姿が映し出される。この情報を発信し、行政、地域のさまざまな団体とともに考える場、地域福祉と街づくりをともに考える場を小さな保育所が創り出している。（※参考、19頁資料）

これらは自治体の行財政水準の低いなかで、自主的で協同的な福祉実践・福祉事業を生み出している。そして住民自身によって評価され支えられている。それらは「命にかかわる待たなし」（池上）の切実、深刻な課題ではあるが、担い手たちは意欲的で充実感をもってとりくんでいる。

### 異質なものを学ぶ場に

教育、文化運動の実践の世界では、自らの信念、志向に確信と誇りを持ち、他の試みとの相違を鮮明にしようとするあまり、排他的になる傾向がある。「協同」「共同」を語りながら、実際場面では相反する場面が現出する。

分科会ではできるだけ異質な実践が交流され、学べる構成にした。スポーツと芸術文化を〈文化・スポーツは自分たちの手で〉とまとめたが、少年サッカークラブ監督（精神科医）の「自分は芝居は好きでもないし、みたいとは思わない」という刺激的な発言もあり、それぞれの価値をめぐっての討論になった。子ども劇場関係者は「私にはスポーツとの幸福な出会いがなかったのだ」と納得し、監督もまた「しかし子どもがみたいといってそちらに行くのは否定しない」という相互の価値の認め合いが生まれた。

### 「協同」の実践に歴史的理論的展望を

池上氏の基調講演は、「協同」の実践に思想的展望を与えるものであった。高度成長のなかで生まれた「人の言うことが聞けて自分の欲求を素直

に表現できる人々」によって1960年代後半から、新しい子育て文化をもった家族づくり、地域づくりがはじまった。しかし、これは当時まだ労働文化、産業文化に及ばず「会社主義」「仕事人間主義」等に包摂された。しかし70年代後半から健康と命を脅かす事態となるなかで、子育て文化は新たに労働文化、産業文化など生活全般へと拡大されてきた。しかもこれらは、行政と企業の谷間においては実現されず、「協同の組織による開拓者の機能」（糸賀一雄）によって価値が生み出され広く承認される（公共性）という過程をたどった。そこから新たな専門家が生まれ出され、また制度が生み出された（保育所や共同作業所など）。80年代後半からは、さらに芸術文化や教育の分野に協同の組織は発展しており、さらにはまちづくりと新たな産業の再生に及ぶことの必然を産業・社会構造の動向を踏まえて講演された。

閉会全体会での増山講演もヨーロッパ生活の豊富な事例から、〈子育て・文化協同〉がめざすイメージを語るものであった。

### 集会にみる協同事業を担う人格

和歌山集会が、日常は異なる場に身を置く事務局メンバーによって準備されながら、プロデューサー集団、実務者集団として機能しえたのは、各分野・団体に鍛えられた組織性を備え、かつ「私の願い」を自覚した市民的に自立した人材だからである。短時間の情報交換と議論で、直ちに自らの課題（オフト監督流にえば「アイコンタクト」による「タスク」の自覚）を受けとめ意欲的に処理する能力があった。

また制約された条件のもとで充実した分科会運営ができたのは、司会者とコメンテーターの力量の高さによる。特に和歌山大学の研究者の活躍はめざましいものがあり、また〈市民の実践に学び自分のこれまでの学問を見直す必要を感じた〉という真摯な姿勢は、〈市民と専門家〉〈地域と大学〉の協同の可能性、和歌山での「協同」の今後の可能性を示した。